

七の市商店街 取材記録～その1

「フラワー 花よし」・・・花屋 店主・・・引地淑子さん

仕事を退職後、花淵にて開業。震災当時は実家のある塩釜市にいたが、自宅兼店舗は全壊。被災後はボランティアセンター業務に関わっていたが、花を通じて人とのふれあいの場を作りたいと思い仮設店舗での再開を決断。『物を売るのではなく、人を売る』をモットーに、昔からの繋がりを大切に、みんなに喜んでもらえれば嬉しい。仮設店舗で営業しながら、家から出られないお年寄りも多いので、配達も継続してやっていきたい。」と話されていました。お店の中は長持ちするように手入れされた花、被災した障子、広くとられた談笑スペース・・・など、工夫して作られた安らぎ空間には、利益よりも笑顔を大切にしている暖かい雰囲気



「八木原美容院」・・・美容院 店主・・・八木原勇子さん



震災により自宅は残ったものの、菖蒲田にあった実家兼店舗が流失。ガレキの撤去などをするボランティアを見て、「自分も何かしなきゃ」と避難所でカットを始め、以前からのお客様からお店の再開をお店の再開をり、再開を決意。

「前のお店はベージュと薄いグレーを基調とした清潔感ある雰囲気だったので、またそんなお店が作れば・・・。髪を切りに2時間、お茶のみで1時間っていう感じで、みんなの休憩所・憩いの場となればいいなあと思います。」とお話くださいました。

また取材中にボランティアに対する感謝の言葉を何度も口にされ、「ボランティアの方も洗髪しに是非ご利用下さい！」とコメント下さいました。

七の市商店街の店主さんに共通して言えるのは、「商売」よりもお客さんやみんなの集まる場所・憩いの場にしたいという気持ちが強いこと。そんな人情味あふれるこの「七の市商店街」に是非、足を運んでください。

七の市商店街 取材記録～その2

「カイロプラクティック 伊丹」・・・整体院 店主・・・伊丹亨さん

仕事を早期退職し、平成18年12月に開業。震災により自宅兼店舗は全壊したものの、翌日から消防団員として約1ヶ月間、救助・捜索活動に参加。その後、なじみ客からの「まだやらないの?」と言う声に後押しされ訪問整体を始め、仮設商店街に応募。

「この仕事は地元でできるし、やっぱり地元が一番暮らしやすい。腰痛や肩こりがひどく、疲れもたまっているであろう40代～50代の一生懸命働く“お父さん世代”の方に特に来て欲しいですね。」とおっしゃっていました。

お店では震災により流失していた整体用枕が、店舗から遠く離れた場所で偶然見つかри、現在も大切に使われています。



「三浦商店」・・・青果店 店主・・・三浦カツ子さん



菖蒲田で創業40年のお店が震災により全壊。移動販売で仮設住宅を回っていたところ、お得意さんから「まだ店は再開しないの?」と頻りに連絡が入ってくるようになり、コミュニケーションの場・特に50代～60代の女性の居場所が作れればと思い、再開を決断。

「八百屋はモノを売るだけでなく、地域の拠り所としても機能できればという思いでやっていました。みんなが孤独や寂しさを感じないよう、ここへまた以前のように人が集まって、語ったり笑い合ったりできればそれでいいなって思ってます。」と話されていました。

お店の中にはイスや机が置いてあり、座ってお茶を飲みながら話せるように配慮されています。きずな館スタッフがお店に行くと

常連さんが何人か必ずいらっしゃるそうです。

七の市商店街の店主さんに共通して言えるのは、「商売」よりもお客さんやみんなの集まる場所・憩いの場にしたいという気持ちが強いこと。そんな人情味あふれるこの「七の市商店街」に是非、足を運んでください。

七の市商店街 取材記録～その3

「夢麺(むーめん)」・・・らーめん・定食等 店主・・・岩本善治さん

以前はトラックの運転手で、夏は実家の「海の家」を手伝っていた。震災後、「海の家」も自宅もなく再建を考えた時、「海の家」で経験のあったラーメン屋をやろうと決意し出店。

「店名は『みんなに夢を与える場所・店』にしたいという願いを込めた。そして、ここが『みんなの居場所・拠り所』になればとも思う。子供が漫画を読んだり、友達と話したりできる場にもしたいなあ。食材はできるだけ地元の海苔やわかめを使って、地元の漁業復興の応援をしたい。」と熱く語ってくれました。

肝心の「味」についてですが、仮設住宅の集会所で聞いた評判はとてよく、取材で試食したメンバーも「正直びっくりした。あっさりとしているのにコクがある。こんなラーメン他にない。」と絶賛のコメント。七ヶ浜を訪れた際は是非一度味わってみてください。



「理容 ホシ」・・・理容店 店主・・・星仁さん



昭和44年開業で、震災により自宅兼店舗が全壊。道具も全て流され廃業を考えていたが、避難所にいる間も常連さんの家に行き、パイプ椅子の上で髪を切ったりしていた。そんな時、組合から道具一式の提供をしてもらえることになり、生まれも育ちも七ヶ浜なので、どうしてもこの町で再開したかったので出店を決意。「被害を受け廃業する仲間から道具をもらったが、気持ちも引き継いだ様な心境です。今後、再開しようとする仲間がいれば、この店の中で始めてもらうのも大歓迎で、『代表者』として出店したつもり。また、仮設の男性入居者の憩いの場にしたいし、七ヶ浜は大丈夫になった

という『情報発信地』になりたい！」と力強く話していらっしやいました。店主さんの言葉を裏付けるようにカット台が3台お客さんが待つ席も10席近くあり、ゆったりとくつろげる空間がそこにはあります。

「佐藤魚店」・・・鮮魚店 店主・・・佐藤貞子さん

昭和45年から代々崎地区で魚屋を始める。当初はリヤカーだったが、店舗を構えてからは、お客さんの要望に応えるうちに半ば「何でも屋さん」のようになっていった。震災により自宅兼店舗の1階が大きな被害を受け、保冷库や車が流され、大型冷蔵庫2台もシャッターを突き破って流失。お店をやめようと考えていたが、息子さんに後押しされ仮設住宅に移動販売をはじめ、お客さんの「おいしかったよ～」の言葉に励まされ出店を決意。「震災前は店が地域の交流の場になっていました。世間話をしたり、情報交換をしたり、『久しぶりだね～』と言いながら集う場。『買わなくてもいいから顔を見せに来て!』というのが私達の心情です。仮設店舗になっても、前と変わらずみんなが集える場所になればと思います。」と話してくれました。



七の市商店街の店主さんに共通して言えるのは、「商売」よりもお客さんやみんなの集まる場所・憩いの場にしたいという気持ちが強いこと。そんな人情味あふれるこの「七の市商店街」に是非、足を運んでください。